

主 題：生きるために死ぬ 1

聖書箇所：マルコの福音書 8章34－38節

私たちはみな褒められたいと思います。皆さんはきっと褒められることが好きだろうと思います。私たち人間はいろいろなことを通して自分にとって良い思いを持ちたいと願います。第一礼拝では、つい先日まではやっていた「脳年齢」を測定するゲームのことを話しました。脳のやわらかさを測るわけですが、それをすると、自分の脳がどれぐらい若いのかという診断が出るわけです。もしやったことがある方がおられるなら、多分共感していただけるだろうと思うのですが、私も試したことがあります。実際の年齢より若いようにとはだれもが願うことです。50－60歳代の方が20歳代ですと言われると非常にうれしいです。女性の皆さんはよくわかるでしょう。例えば皆さんが美容院に行って、髪の毛をきれいにし、非常に気に入った髪型になって家に帰った時に、皆さんのご主人がそれに気づくか気づかないのかというのは非常に大きな問題かもしれません。一言、そこで何か良いことばがかけられると非常にうれしくなりませんか？男性の皆さんもよくわかるでしょう。仕事を一生懸命やった時に、自分の努力に対して、自分の成果に対して良い評価が与えられるのか与えられないのか、そのことは非常に重要なことです。私たちの生きている人生は余りにも困難が多いゆえに、私たちはあらゆるところでできるだけそのような心地よさ、励ましを求め、自分が良く思われたい、良く受け入れられたいと考えながら生きようとしています。

今、私たちの社会において非常によく聞くメッセージというのは、私たちはよい者であって、私たちには価値があるのだというものです。私たちが生きている社会というのは、自分の尊厳、自己尊厳、または自尊心というものを一生懸命高めようとする社会です。私たちがそうして自分は尊い存在であるのだ、自分は価値のある存在なのだとして一生懸命思おうとする、そうすることが必要である、いや、そうしないといけない、そのように私たちに向かって語りかける、そんな社会に私たちは生きています。このことは、今に始まったことではありません。ソロモンが言うように、この地上には新しい事柄というのは何もないわけです。このことは昔から繰り返されてきました。事実、私たちが人間の歴史を見た時に、このように自己愛、自己尊厳を求める、そのような生き方は人間の歴史の一番初めからあったわけです。なぜ、アダムは罪を犯したのでしょうか？なぜ、エバは蛇の誘惑のことばに耳を傾けたのでしょうか？蛇が誘惑したのはこのことでした。「**あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。**」（創世記3：5）と。これほどまでに、究極的に偉大な存在というのはないわけです。その「神と同じような者になれる」という誘惑に対して人間は「私はぜひそうしてみたいものだ」と言って、その誘惑の中に落ちて行ったわけです。

確かに、この世がそのメッセージを語るのにはよくわかります。この世が私たちに対して、そのように自分自身を尊びなさい、自分自身を愛しなさい、自分がすばらしい存在だと思わないといけないですよというのは、それほど不思議なことではないかもしれません。けれども、近年何が私自身の心に憤りをもたらせるかということ、それは、この「自分には価値がある」、「自分を愛すべきである」というメッセージが、教会で語られているということです。教会の中であって、自分を愛し自分は尊い者であると考えなさいというそのメッセージが、至るところで語られているということです。多くのとき、私たちは「神の目にあってあなたは尊いものです」ということばを耳にします。それがまるで福音のメッセージの中心であるかのようにみことばが語られます。そして、このメッセージこそまさに、自画像、自分自身の姿がメッセージの頂点であるかのような現在の福音を作り出しているのです。人々はそのようなところで、自分たちが神の愛を受けるに相応しい者だと思いなさいと言われます。神があなたのことを「高価で尊い」と思っているから、神はあなたを救いたいと願っているのですよと、そのように告げられます。神はあなたを特別に造られたのだから、あなたは神の前に価値があるから、神はあなたを救いたいと願ってあなたが神のもとに帰ってくるのを心待ちにしておられると。確かに、神は私たち一人ひとりを特別に造られました。それゆえに、ここにいる私たち一人ひとりとは同じ存在ではありません。みなユニークです。一人ひとりを独自のものとして造られました。それゆえに、特別であるというのは確かにその通りです。また、神は確かに私たちのことを愛しておられ、私たちがイエス・キリストを通して与えられる救いの賜物を受けることを願ってやみません。聖書はそのことを教えています。けれども、聖書は私たちが神の前に余りにも価値があるから神は救おうとしているとは教えていません。私たちが、そのすばらしい価値のある自分に気づくことによって、神の前に出て行くことができると認めなさいとは教えないのです。

事実、聖書はその反対を私たちに教えます。聖書は私たちに対して、クリスチャンであるなら、「自分自身を捨てて、キリストに従いなさい」と教えます。私たちは、自分自身が神の前に高価で尊い者、神の救いを受けるべき価値のある者であると考えてるのではなく、むしろ、私たちは神からのさばきを受けるにふさわしい、永遠の死を受けるにふさわしい者であると教えるのです。聖書は、もし、私たちが私たちのうちに何か良いものがあると考えてるなら、それらすべてを捨て去ることがなければ、天の御国に入ることはできないと言います。このことに関して、最も簡潔に、しかも非常によくまとめられて語られたことばをマルコの福音書の8：34－38に見受けることができます。そこで、イエスは私たちに対して、救いに至る信仰というものがどういうものなのかを教えようとしています。私たちクリスチャンが生きて行くその生涯というのがどういうものであるのかを私たちに示そうとしています。イエスが語られた多くのことばの中にあっても、最も過激な発言と言ってもいいこの箇所、そこでイエスは私たちに対して、どのようにしてキリストに従わなければいけないのか、そして、なぜ、私たちがそれをしなればいけないのかを教えてください。これがイエス・キリストが語られた福音です。

イエスはここで私たちに要求をし、その要求を説明してくれますが、それを見た時に、私たちは、私たち自身が自分自身に対して死ななければならないことをはっきりと見て取ることができます。神の民となるために、救いを得るために、私たちは自分を殺さないといけない。それがイエス・キリストが語った福音であり、それが私たちが注意深く耳を傾け、はっきりと理解し、受け取らなければいけないメッセージなのです。今朝、皆さんと一緒にこの箇所を注意深く見て行きたいと思います。そして、キリストが私たちの人生に何を要求し、そして、なぜその要求をしたのかということを見て行きます。それを通して、私が心から願うことは、これらのことばを見た私たちが、はっきりと正しく、イエスが「わたしに従いなさい」と言われたその意味を理解することができるように、そして、そのことをしっかり実践できるようになることです。

◎背景

マルコの福音書8：34－38をお開きください。

「8:34 それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。:36 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。:37 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。:38 このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」

この箇所は、共観福音書——マタイ、マルコ、ルカの3巻すべてに記されています。特にこの部分だけではなく、その前後に起こった一連の事柄に関して、マタイ、マルコ、ルカは共通して、多少詳細の違いはありますが、同じ内容を私たちに教えてくれています。イエスが語られた34節からのメッセージを私たちが正しく理解するために、その背景を少し覚えておきましょう。

イエスはこの日、ご自身の生涯の中でも非常に重要な一日を過ごされました。特に、弟子たちとのやり取りの中にそのことが表われています。私たちが福音書の記録を見て行く時、イエスがここで弟子たちに対して、最も重要な質問をされているのを見ることができます。そのことがマルコ8：27に記されています。イエスは「**人々はわたしをだれだと言っていますか。**」と言います。それに対して弟子たちはこう答えました。「**バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます。**」、すると、イエスは彼らに尋ねます。「**では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。**」と。これまで2年少しの間、全イスラエルの前でイエスはご自身が一体だれなのかを大胆に告げ知らせて来られました。イエス・キリストがメシヤであり、彼こそがまさに生ける神の子であるということの人々に語り、そして、そのことを奇蹟をもって証明してきたのです。けれども、残念ながら、イスラエルの民はそのことを拒絶しました。それを受け入れることをしませんでした。それゆえに、イエスが奇蹟をされた時に、パリサイ人や律法学者たちはそれを見て、彼は悪霊の力によって悪霊の権威によってそれをしたのだと言いました。そのことは、マタイの福音書12章に記されています。また、イエスが五千人に給食した後、人々に対して「わたしはいのちのパンである」というメッセージを語った時、人々はそのメッセージを聞いてイエスから離れて行きました。キリストがだれであるのかということキリストが説明し、それを証明しようとしたにもかかわらず、人々はキリストから離れて行ったのです。そのような中で、そのことを近くで見、そのことを学んできた弟子たちはイエスに答えました。特に、ペテロが代表して彼は「**あなたは、キリストです。**」（マルコ8：29）と言います。マタイの福音書では「**あなたは、生ける神の御子キリストです。**」（16：16）と記されています。この答えを喜ばれたイエスは、マタイの福音書16：17－19で、人間の歴史の中で初めて、その「**あなたはキリストです。**」「**あなたは生ける神の子です**」という宣言の上に「それに基づいてキリストのからだである教会を建てる」という

話をされました。12人の弟子たちに対して、キリストがだれであるのかということをはっきりと理解した人たちに対して「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」と宣言されたのです。

それだけではありません。さらにイエスは弟子たちに対して、もう一つこれまで語らなかったこと、ご自身がこの後、多くの苦しみを受け、実際に死を体験し、そして復活するのだということを告げ始められるのです。マタイ16:21、また、マルコ8:31にそのことがはっきりと記されています。「その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。」(マタイ16:21)、「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」(マルコ8:31)。けれども、ペテロはイエスのそのことばに対して黙っていることができませんでした。彼が考えていたメシヤ像というのは、そのような苦しみを受け、人々から捨てられるものではなかったゆえに、ペテロはイエスに「そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」といさめるのです。余りにも理解の乏しかったペテロに対して、イエスは彼を正し、厳しいことばをもって彼を戒め、そして、これから見ようとしているこの箇所を語り始めるのです。

☆イエス・キリストが私たちに要求されていること

この34-38節のところで私たちは二つの事柄を見ることができます。

1. イエス・キリストが何を要求したのか 34節
2. イエス・キリストがなぜ要求したのか 35-38節

最初の34節にはその要求が記されています。そして、35-38節のところでその説明がされているわけです。今日は34節の要求を見て行きたいと思います。

1. イエス・キリストが何を要求したのか 34節

イエスが要求されたこと、それはいったい何なのでしょう？

◎だれに語られたのか。

まず最初に、イエスがだれに語られたのかを考えなければいけません。

1) **群衆に**：マルコの福音書には非常に興味深いことが記されています。「それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。」と。マタイとルカの福音書にはこの「群衆」ということばが記されていませんが、マルコはそのことばを加えることによって、イエスがだれにこのメッセージをしたのかということをはっきり示しています。「それから」ということばは33節までのことが起こった「その後」ということです。同じ日に、ペテロを戒めることばを語った後で、イエスは周りにいた12人だけではなく、そこに集って来ていた多くの人たちに対して呼びかけたのです、「こちらに来なさい」と。つまり、このメッセージは、一方で「群衆」に対して語られたものでもありました。彼らは、イエスがピリポ・カイザリヤの村々を訪れた時に、イエスが来られていることを聞いてイエスを一目見たいと集って来た人たちでした。彼らはイエスが語ろうとすることに興味を持っていました。イエスがなされる奇蹟に興味を持っていました。できれば、その恩恵にあずかりたいと思い、できれば、人々が興味を持っていたこのイエスがだれなのかを一目見たいと思っていたのです。群衆たちのほとんどが、実際には救いを得ていませんでした。彼らはもしかすると、純粋に何かを求めてイエスのもとにやって来ていたかもしれませんが、その多くは、単にイエスが近くにいるということを聞いて集って来ただけの者たちでした。このグループの人々に対してイエスはこのメッセージを語られたのです。救われていない、イエスに対して献身を持っていない人たちに対して、単に何となくイエスに興味を持っていたから集っていた人たちに対して、イエスはこの要求をされて行くわけです。

2) **弟子たち**：2番目のグループは弟子たちでした。彼らはこの2年間イエス・キリストに従順に従って来た者でした。彼らはもう既に、すべてを捨ててイエスの後について行くことを決意した者たちでした。それを2年間実践してきた者たちでした。彼らはたった今、このイエスこそがキリストであり、メシヤであると告白しました。彼らはイエス・キリストが生ける神の子であることを理解していました。その弟子たちに対して、イエスは同じようにこのメッセージを語ったのです。

メッセージというのは、私たちがその対象を見た時に、そのメッセージがどんなものなのかを知ることができます。この34節からイエスが語ったメッセージは一つのメッセージでした。けれども、その一つのメッセージは、2つのグループに対して同じように語られたのです。もう既に、自分を捨ててイエスに従った者たちに対しては、そのメッセージは「その道を歩み続けなさい」という励ましのメッセージでありました。あなたが歩んでいる道は正しい道だから、そこを歩み続けなければいけないという勧めのメッセージでした。同時に、群衆たち、献身をしていない、決心をしていない、ただ単に興味しか持っていなかった人たちに対して、このメッセージはまさに伝道のメッセージでした。あなた方がしなければいけない選択はこれだと、人々に迫るメッセージでした。けれども、そのどちらも同じメッセ

ージなのです。なぜなら、これが私たち人間に求められている、私たちがしなければならない、救いを得てキリストの民となって行くために必要なキリストの要求であるからです。それゆえに、このメッセージはここにいるすべての人たちに対して重要なメッセージです。皆さんがたとえ今、私は救いを抱えていると確信しているにしても、私はまだ救われていないと思っているにしても、どちらにしてもイエスは皆さんにこのメッセージを語っておられるのです。だから皆さん、このメッセージをよく聞かなければいけません。イエスのことばに耳を傾けて、イエスが言っていることが何なのかをしっかりと理解しなければいけません。信じていないならこのメッセージを信じなければいけません。信じているなら、このメッセージに従って生きなければいけないのです。

◎土台を据えること

では、イエスはいったい何を言われたのでしょうか？最初に「**だれでもわたしについて来たいと思うなら、**」と言います。イエスはここで私たちに対して土台を据えてくれています。その後、要求が出て来るのですが、その要求をするに当たって、この要求はこういう人物でないと適応しませんよと言うのです。それが「**だれでもわたしについて来たいと思うなら**」ということばです。先ほど見たように、イエスが語った相手は、献身していた弟子たちと、全く献身のなかった群衆たちでした。それゆえに、イエスは個人的なメッセージでありながら、非常に広い範囲の人たちを含むことばを使っているのです。事実、「**だれでも**」というのは「すべての人、どんな人でも」ということです。そして、「**わたしについて来たいと思うなら**」と、この「**思うなら**」というのは、実際には「願う、そのことを望む」ということばが使われています。イエスが言われることは「だれでもこのことをしていないといけません」ということです。願っていないといけない、そのことを求めていないといけない、自分の意志によってそれを決めていかなければいけないということばです。イエスに従う、イエスについて行きたいと願う、そのような人物であることという意味です。

このことばから、私たちはクリスチャンになるに当たって、私たちが何となく歩んでいたらクリスチャンになりましたということなどあり得ないことを知ります。何となく気ままに自分の人生を歩いていたら知らない間に私はクリスチャンになってしまったということはないということです。どこかで私たちは自分の意志で決意するのです。そう思いなさい、そう願いなさい、そうするのだということです。そこには、弟子になろうとする者に対して、どこかで必ず起こる決断の時というのがあることをここで示唆してくれているのです。心からの決意がなければいけないのです。偉大なる先生と呼ばれる人たちは弟子たちをもっていました。彼らは、その先生の後をついて、その先生が座るところに座り、その先生が立つところで立ち、その先生が語ることばに耳を傾け、その先生が言うこと一つ一つをまさに実践しようとして学んでいました。イエスが言われることは「わたしの後ろに並びなさい」ということです。もし、あなたがわたしの後ろに並びたいと、そのようにあなたが決意するなら、わたしが歩くところを歩き、わたしが語ることばを語り、わたしが立つところに立ち、わたしの仲間と一緒にとどまり、わたしの向かうところに向かうと言うのです。イエスがここで言っていることははっきりしています。それは「イエスの弟子となること」です。どこに行くにもイエスについて行くことです。何をすることもイエスがすることをすることです。何を語るにもイエスが語ることを言おうとする、そのことです。イエスの友を友とし、イエスの敵を敵としなさいという、まさにこのことの召しであるのです。「**わたしについて来たいと思うなら、**」、それは自分自身をイエス・キリストと完全に関連づける、イエス・キリストとの関係を確かに確立する、その決意への召しであるわけです。このような者がこれからイエスが語る条件を満たしていかなければいけないと言うのです。

この先を見る前に、また一つ考えなければいけません。イエスがこの文脈の中で、今からどこに行くと言われていたのでしょうか？覚えていますか？ペテロは「**あなたはキリストです**」とイエスに答えました。それを聞いたイエスは何を言われたのでしょうか？31節のところでイエスは「**それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。**」と言われます。このことが今起こっていたのです。マタイの福音書では、はっきりと「エルサレムに行く」と書いてあります（マタイ16：21「**その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。**」）。何を言っているのでしょうか？イエスが従いなさいと言われたその時、イエスが言われることに従って行った時にたどり着く場所はどこだと思いますか？弟子たちが聞いたのは、わたしはこれからエルサレムに行って、ユダヤ教徒から完全に退けられ、イスラエルの民から拒絶され、苦しみ、死を迎えるということです。だから、私に従って来なさいと言うのです。単に、何となく、わたしは今ここにいるから後をついて来なさいよと言っているのではないのです。もし、だれかがこのキリストのことばに従って行こうとするなら、キリストに従って生きようとするなら、その人が迎える結末というのははっきりしています。少なくとも弟子たちはそのことを考

えたでしょう。私も長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、多くの苦しみを受けて死ななければいけない。皆さん、知っていますか？それがイエスが私たちを召している道なのです。その道を進みなさいと言うのです。その道を進めば必ずこういうことが起こると。なぜなら、イエスが経験したその道を、私たちはそのすぐ後について歩いて行くからです。

私たちはそのように自分自身に問いかけなければいけません。私は本当にキリストに従って行こうと思っているのか？このような苦しみがあることを知っていながら、そのような困難が目の前にあることを知っていながら、私は本当にイエスに従って行きたいと思えますと言っているかどうかです。キリストが求める道というのは、まさにその道なのです。皆さんは自分の人生を捨てる、そのような道に進むことを思っていますか？キリストの歩みに沿った人生を生きようと願っていますか？皆さんは、皆さんの愛する者たちが皆さんの敵になったとしても、このキリストに従って行こうと思っていますか？イエスは「わたしについて来たいと思うなら」と言った後、私たちに条件を提示しています。要求をしています。三つの事柄がここで記されています。1番目は自分を捨てることであり、2番目は自分の十字架を負うことであり、そして、3番目はわたしについて来なさいというものです。イエス・キリストは自分の弟子たちに対して、わたしが定める方法であなた方は従わなければいけないと要求しておられます。これは交渉することができるものではありません。ちなみに「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と、日本語では「そして」ということばが一つしか見受けられませんが、原文では「自分を捨て、そして自分の十字架を負い、そしてわたしについてきなさい」となっています。つまり、これら三つのものはすべてパッケージなのです。私は自分を捨てるけれども、十字架は負いませんとか、私は十字架は負うけれども従いませんということはないのです。これらすべてをして、イエスが要求したとおりに生きなければわたしについて来ることはできないとイエスが言っているのです。その決断をしたなら、このことをしっかりと生きてきなさいと言うのです。私たちは自分の条件で救いへと入って行くことはできません。私たちはキリストの条件に従って救いを得ようとしなければいけないのです。私たちはキリストに従うか、従わないかのどちらかでしかないのです。皆さん思い出してください。ここには二つのグループがいました。イエスに献身していなかった、イエスを信じるのがなかった、単に興味だけしか持っていなかった群衆と、既に、その信仰を告白していた弟子たちとの二つのグループです。その者たちに対して、イエスは一つのメッセージを語られたのです。伝道のメッセージであり、また、励ましのメッセージでした。三つの要求を見て行きましょう。

1) 自分を捨てる

彼らに対してイエスが語られた一番目の要求は「自分を捨てなさい」ということです。「自分を捨てる」、何となく分かるようで分からないことばです。このことばをよく理解するために、私たちはこのことばがどのようなところで使われているのかを見る必要があります。それによって、私たちははっきりと分かると思います。この「捨てる」ということばは、実は、新約聖書の中に11回しか出て来ないのです。しかも、この11回というのは、二つの出来事のところでしか使われていないのです。一つは、(1)今私たちが見ているこの同じ箇所です。マタイ、マルコ、ルカの福音書に何回かそのことばが使われています。もう一つは、(2)それぞれこれもマタイ、マルコ、ルカの福音書に記されていますが、受難週に使われています。受難週の中で起こった出来事、しかもイエス・キリストが捕らえられた晩の話です。2階の席でイエスはひとりの人物に向かってこのことばを使われたのです。だれだか覚えていませんか？ペテロです。マタイの福音書26:34にこのようなことばが記されているのです。「**イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」**」と。日本語では「知らないと言います」と訳されていることば、これが「捨てる」ということばと同じです。皆さん、ペテロが何をされたかご存じですね？イエスが捕らえられた後、主が語られたように鶏が鳴く前にペテロは3回「私はこの男を知りません」と宣言します。マタイ26:75でこのようなことばが記されています。「**そこでペテロは、「鶏が鳴く前に三度、あなたは、わたしを知らないと言います。」とイエスの言われたあのことばを思い出した。そして、彼は出て行って、激しく泣いた。**」と。「そんな人は知らない」、彼は誓ってそのように言ったのです。私はあの人と全く一切の関係を持っていませんということ。だから、私はあの人を知らないし、見たこともないし、聞いたこともないし、一緒にいたこともありませんと、ペテロはそうのように言ったのです。

キリストと私は全く関係がありませんと言った、その同じことを私たちは自分自身にしなさいと言われるのです。完全に、圧倒的に、自分自身と切り離されなければならない、関係を持つてはいけない、「自分を捨てる」、それがキリストに従おうとする者に対して求められている条件なのです。私は私と一切の関係を持ちません、私は自分自身を自分の生活の中心に置くことは止めます、もう、その自分とは関係ありません、私はもう自分自身を愛しませんと。ペテロがキリストに対してしたように、私たちは自分に対してそう言わなければいけないのです。私はこの人を知りませんと言って、私たちは自分に

対して指を向けなければいけないのです。なぜなら、私たちのうちにある私たちの生まれ持った性質というのは、神の前にあって、汚れたもの以外の何ものでもないからです。ここで主が言われている自分自身、それは私たちが生まれ持っている罪深い汚れた性質です。すべての人の中心に存在する、すべての人を罪のうちにとどめる、その罪の性質を持った私自身、この私自身を脱ぎ捨てなさいと、聖書は何度も何度も私たちに呼びかけます。まさにこのことこそ、私のうちには二つの性質があることを教えます。神に喜ばれることをしたいけれども、私のうちにある肉がそれをさせないでいるとパウロが言う通りです。イエスは言われます。あなたは自分を捨てなさいと。私たちは自分自身の罪深さを理解しなければいけません。私たちは神の前に立つ価値がない自分自身を見なければいけません。私たちのうちには何一つ良いものはないのです。私たちが持って生まれた性質というのは、私たちがその関係を完全に破棄しなければならぬ汚れたものだったのです。

だから、イエスは「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。**」(マタイ5:3)と言われました。神の前に立って、私には一切誇るものがないのだということを認める者こそが幸いだと言うのです。なぜなら、その人は自分がどんな者かをはっきり知って、神の前に悔い改め始め、神のあわれみを求めるようになって行くからです。自分自身の汚れをはっきりと理解し、自分のうちに良いこと、義、価値、そのようなものが何一つないことを認める者だけが、天の御国を受け継ぐのだと、イエスは言われました。そのことを考えると、なぜ私たちは「あなたは神の前に価値がある」などというメッセージを聞きたいのか分かりません。よく考えてみてください。どうしてイエスは、あなたに価値があるのに、その価値のあるあなたを捨てなさいと言われるのでしょうか？あなたは価値があるから神が救いたいと願っているのだったら、どうして、その価値のあるものを横に置きなさいと言われるのでしょうか？どうしてそれを取り除きなさい、そんなものと一切の関係を持つてはいけないと言われるのでしょうか？私たちはどこかで履き違えているのです。どこかで間違っているのです。私たちが神の前に立って私たち自身を見た時に、私たちが見るのは自分自身の価値ではありません。間違いなく自分自身のうちに価値を見出すことはありません。なぜなら、神の前に立った時の私自身は罪深い汚れ果てた者でしかないからです。だから、イエスは自分を捨てなさい、そのような汚れと別れなさいと言うのです。そのことをしっかりと気づいて、そのことをよく認めなさいと。それがイエスが語られた最初の条件だったのです。

2) 自分の十字架を負う

2番目にイエスが求めることは「**自分の十字架を負う**」ということです。キリストに従おうと思う者は単に「自分を捨てなければいけない」ことだけではありません。自分の十字架を負わなければいけないのです。私たちはこのことばを聞いた時に、どうしても21世紀的な考え方をしてしまいます。二千年経った今、私たちが「十字架」ということばを聞いて想像するのは、私たちの胸元に輝くアクセサリーかもしれません。でも、当時の人たちにとって、十字架というのは全くそのようなものとは関係ありませんでした。私たちはこの「十字架」ということばを間違っただけで理解することが多くあります。多くの人たちは、ここで言われているイエスが架かっている十字架はイエスご自身の十字架だと言う人もいれば、または、私たちが人生の中で負わなければいけないさまざまな困難や苦しみのことを指していると言う人もいます。でも、イエスはそのようなことは一切言っていません。当時の人たちがこの「**自分の十字架を負い**」ということばを聞いた時に想像したことは何か？理解したことは何か？ということを考えなければいけないのです。十字架—それは当時のローマ帝国において最も極悪な犯罪に対して執行された、一般に公開された、そして、最も野蛮な処刑の方法でした。事実、この十字架刑という処刑の方法は、余りにも非人道的であるとローマ人自身が考えたゆえに、ローマの法律には、ローマの市民権を持っている者は十字架刑で死んではいけないというように定められていました。この処刑は、有罪を宣告された犯罪人が自分自身の十字架を背負って処刑の場所まで歩いて行くことから始まりました。十字架の横の棒を担ぐわけです。ちょうど、イエスがピラトにさばかれた後、ゴルゴダの丘まで嘆きの道を通って行かれたその姿と同じです。それが、人々がイエスが「**十字架を負い**」と言った時にイメージしたことなのです。十字架を負うということは、極悪非道の人間であるということを公にさらされて、圧倒的な辱めを受ける、そのようなことなのです。「**十字架を負う**」というのは処刑の列に並ぶことであり、死への行進を始めることなのです。

それだけではありません。当時のローマ帝国において、この十字架刑というのは人々に向けるメッセージでもありました。「**十字架を負う**」ということは、その人物がローマによってさばかれ、有罪と認められたことを表わしていました。ローマに対して反抗し、ローマを滅ぼそうとしたけれど、その偉大な、圧倒的な権威を持つローマの支配下に置かれ、今まさに処罰を受けようとしていることを表わすものでした。十字架は、人々の目の前で、それらの事実を圧倒的な形で示し、それをもってローマ人はローマ皇帝に対する恐れを民衆にもたらそうとしたのです。イエスが「**自分の十字架を負い**」と言った時

に人々が想像したことはまさにそれでした。そこには恥がありました。そこには苦しみがありました。そこには死があったのです。キリストに従って行こうと思う者は、その十字架を負ってなければいけない、今まさに私は死への行進を歩み始めた、なぜなら、私は有罪と定められたからと。けれども、真にキリストに従うと思う者は、それを承知の上で、喜んで自分自身がつけられなければいけない自分の十字架を負って、自分の死の行進を始めて行くのです。すべてのクリスチャンには自分の十字架があります。私たちはキリストの後をついて、この十字架を背負って行くのです。私たちはクリスチャンであるなら、今まさに処刑の順番を待っているのです。私たちはいつの日かその処刑場に行きます。そして、古い自分自身を確かにこの十字架の上につけます。その時に私たちのうちにある肉は完全に滅ぼされ、私たちは新しい者として完全に立つことができます。でも、今私たちは救われて、自分を捨て、自分を十字架につけるために、十字架を負って処刑の道を歩んでいるのです。

私たちはイエスのことばに耳を傾けなければいけません。キリスト教は華やかなものではないのです。クリスチャンであるというのは華やかなものではないのです。イエスが言うように、これは自分自身に対する死の行進なのです。もし、皆さんがキリスト教に自分自身の居心地のよさ、心地よさ、安らぎ、繁栄、成功、そういったものを求めるとするなら、皆さんはキリスト教を信じるべきではありません。なぜなら、地上における信仰の道は、それとはまさに反対のものであるからです。イエスが皆さんに求めることは「わたしに従って行きたいと思うなら、自分を捨て、自分を十字架につける」ということなのです。皆さん、十字架を持っておられますか？神が今この会堂を見た時に、皆さんの背中にそれぞれ十字架が負われていることを見ることができますか？皆さんは自分はもう有罪と定められた者で、キリストに従って行くに当たって、その自分が死んで行くことを願って、どのような苦しみの中も、どのような困難な中も、喜んでキリストの後を追って生きて行こうとされますか？もし、そうでないなら、わたしについて来ることはできないとイエスは言われるのです。

3) わたしについて来なさい

そして、3番目に「わたしに従いなさい」と言われます。このことばをギリシャ語の辞書はこのように説明しています。「常に、この地上におけるキリストの弟子としての非常に近い関係を結ぶ、その決意を促すことばである」と。別の言い方をすると、このことばは「関係」を表わすのです。従う者と従われる者との間にある密接な親密な関係を表わすのです。それがイエスが「わたしについてきなさい」と語っていることばの意味です。私と親密な関係を持ちなさいと言うのです。もう少し、このことばについて考えなければいけません。この動詞は、ここで現在形の命令が使われています。これまでの二つ、「自分を捨て、自分の十字架を負う」というのは現在形ではありませんでした。それをもって、イエスはその緊急性、今まさにそれをしなければいけないということを言い、それを求められました。でも「従いなさい」というのは現在形なのです。継続的にそれをし続けなければいけないのです。習慣としてそれを持っていなければいけないのです。それゆえに、私たちは「私も従いますと一回決心しました」とか、「3年前にそれをしたからいいじゃないですか」ということはできないのです。私たちは従い続けなければいけないのです。クリスチャンであるということは、過去に起こった一回だけの記憶に基づくものではありません。クリスチャンであるというのは、私たちがキリストに従っているかいないかによって判断されるのです。

また、この「キリストに従って行く」、「わたしについて行く」ということを考えた時に、私たちは明らかに「交換」ということを考えることができます。イエスは「ついてきなさい」と言われます。ということは、何を前提にしていますか？これまでについてはついて来ていなかった、または、別の者についていたのです。でも、イエスは、今あなたは自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに継続的に従い続けなさいと言うのです。ということは、そこには明らかに今まで生きて来た道と違う道を見受けることができます。今まで進んでいた方向とは違う方向へ進んでいるのに気づきます。私たちはこれまでは罪の奴隷であったけれども、イエス・キリストを信じるという選択をした時、救いを得た時に、私たちは義の奴隷として、義に従う者になったのだということです。パウロはローマ6章でそのことを説明しています。皆さん、キリストに従うということは、まず、私たち自身が自分を捨てることをしなければ起こらないことです。いつまでも自分が人生の中心であり、自分のことを大切に、自分のためにだけ生きようとするなら、私たちは決してキリストが求めることをして行きたいとは思いません。なぜなら、キリストが言われることは、私自身を愛することではなくて、神を愛し、人を愛することだからです。自分を優先するのではなくて、神を優先しなさいと言うからです。また、自分を十字架に架けることがなければ、自分の十字架を負うことがなければ、その道を進んで行くことはできません。私たちは自分自身に死ななければいけないのです。これまで生きてきた生き方を私は止めると言い、そうして、私はキリストに従って行くと言わなければいけないのです。

そして、最後に、イエスに従うということが完全な生涯のパターンにならないといけません。継続し

て起こって行く生き方でないといけないのです。キリストに従う者はキリストの命令を守ります。詩篇の著者は119：112でこのようなことを言っています。「**私は、あなたのおきてを行なうことに、心を傾けます。いつまでも、終わりまでも。**」と。これが、キリストを信じ、キリストに従って行く者の生き方です。この非常に重要な一日の最後に、イエスははっきりとご自分の弟子たちに対して何を求めているのかを示されました。キリストとの密接な関係を持って、キリストの背後を歩んで行こうと思うなら、人はみな自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしについて来ないといけないと。ちょうど、キリストがエルサレムに目を向け、今まさに苦しみを受け、死に、そして復活へと向かって行くその時に、わたしと同じところに来なさい、わたしと同じように生きなさいとイエスは言われたのです。このキリストの要求を見る時に、そこには心地よさを与える福音を見受けることはできません。福音のメッセージというのは、決して私たちに安らぎを与えるもの、安らぎだけを与えるものではありません。むしろ、福音のメッセージは私たちを責め、私たちに絶望を感じさせるものでなければいけません、少なくとも、最初は。なぜなら、私たちが罪のゆえに圧倒的に失われているということが分からなければ、どうして私たちは救ってほしいと願うでしょうか？皆さん、私たちには罪という問題があります。でも、それは罪を持ったまま私たちが生きることによって解決できるものではないのです。「**自分を捨て、自分の十字架を負い、**」イエスに従って行くのです。

キリストの要求は非常に高いものです。キリストが求めることは非常に難しいことです。どうして、そのような要求を飲まなければいけないのでしょうか。なぜ、このような厳しい要求を聞かなければいけないのでしょうか。イエスはこの後、その説明をしてくれます。それを知ると、なぜ、このメッセージが伝道のメッセージなのかがよく分かります。イエスがなぜこのことを未信者に対して語っておられるのかをよく知ることができます。そして、なぜ、私たちが今急いでこのメッセージに耳を傾けなければいけないのかが分かります。そのことは来週、皆さんと一緒に考えましょう。